

タイトル	教科書掲載現代短歌の研究 ~ 笹井宏之短歌を中心に ~
著者	大村, 勅夫; OMURA, TOKIO
引用	
発行日	2026-03-20

氏名・(本籍地)	大村 勅夫 (北海道)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博(文)甲第6号
学位授与の日付	令和8年3月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	教科書掲載現代短歌の研究～笹井宏之短歌を中心に～
論文審査委員	主査 教授 田中 綾 副査 教授 徳永 良次 副査 教授 田中 洋也

論文内容の要旨

大村勅夫氏の本論文は、短歌初学者への教育的アプローチをテーマとし、現代歌人・笹井宏之の作品を中心に、短歌教育の可能性を考察した研究である。序章、3章10節と、終章(約20万字)から構成されている。

序章では、本論文の目的を述べた。すなわち、最新学習指導要領(平成29・30年告示)のもと、学校教育における文学、とくに現代短歌の学習機会減を問題とし、教科書掲載短歌の分析、短歌初学者に有効と思われる笹井宏之短歌の評釈、授業実践の検討を通して、現代短歌の教育的意義と指導可能性を明らかにするという目的である。

第一章では、最新学習指導要領下の小・中・高等学校国語教科書に掲載された近現代短歌の悉皆調査を行った。掲載歌数や歌人、章末問題・言語活動を分析し、短歌が文学教材としてだけでなく、思考力や表現力育成の学習材として位置づけられている実態を明らかにした。さらに、俵万智の作品を取り上げ、短歌初学者への指導方法と発問の提案も行った。

第二章では、笹井宏之の三歌集を短歌初学者の学習材として位置づけ、それら短歌の受容、教育現場での扱われ方を整理し、研究の意義を提示した。作者の生涯や病歴などの伝記的要素を排除し、身体語彙「手」「指」に注目した評釈を行い、

テキストそのものの分析から笹井短歌の初学者への有用性を例証した。

第三章では、第一、二章の成果を踏まえ、現代短歌を用いた三つのデザイン単元を提案し、高校での実践をもとに考察も加えた。「評」「簡易歌会」、さらに随想を取材とする作歌などの言語活動を取り入れ、短歌初学者の共感力や表現力の伸長を検証し、現代短歌教育の実践的可能性を明らかにした。

終章では、現代短歌を用いた指導実践の成果を総括し、短歌が初学者の解釈力・創作力を育成する有効な教材であることを示した。さらに、その成果が文学教育全体に資する可能性も示唆した。

論文審査結果の要旨

1 審査の経過

審査請求論文に対する審査は、書面審査及び公開口述試験をもって行われた。口述試験は令和8年1月28日に実施された。口述試験では公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。その後、令和8年2月19日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の上、無記名投票した結果、同論文の合格を決定した。

2 評価

本論文は、北海道高校国語教育ネットワークの運営において中心的役割を担い、中堅・若手教員の教材研究および教育実践の推進に寄与してきた大村勅夫氏による、複数年にわたる研究成果を総合したものである。

第一章では、最新学習指導要領下の小・中・高等学校国語教科書を悉皆調査し、近現代短歌の掲載状況および指導意図を具体的に明らかにした点が評価できる。章末問題や言語活動にまで踏み込んだ分析は先行研究がなく、教育現場の実態を把握するうえで資料的価値が高い。また、短歌教育を「創作」「言語文化」「文学教育」「表現教育」の四つの観点から多角的に検討し、俵万智の親しみやすい作風を教材として位置づけし、指導者向けの発問例を提示した点も実践的意義が大きい。

第二章では、笹井宏之短歌の研究に、短歌初学者への有効性という教育的観点を導入した点に新規性が認められる。テキスト分析を中心とした方法論は学術的にも妥当であり、客観性が保たれている。加えて、現代短歌における「身体語彙」の

統計的分析の導入は、研究方法の面でも独創性があり、現代短歌研究としての学術的貢献も評価できる。

第三章では、第一、二章の理論的知見を踏まえ、現代短歌を教材とした解釈・創作単元を設計し、実際の授業実践を通して検証を行っている。「文学国語」における「共感」概念を理論的に整理し、それを授業デザインへと落とし込んだ点に新規性が認められる。また、「評」を中心とした言語活動を理論と実践で橋渡ししている点も評価できる。現場で応用可能な「簡易歌会」などは、現場貢献度が高く、実践研究としての信頼性も確保されている。

個々の短歌評釈においては、日本語音声学や日本語学の知見が十分には反映されておらず、また、口語短歌に重点を置く一方で古典的な文語短歌を等閑視しがちであるなど課題も見られた。しかしながら、本論文は、短歌教育の実践と現代短歌研究とを架橋する論文として高い学術的意義を有しており、今後双方に有益な知見を提供するものと評価できる。

以上の論文審査並びに最終試験の結果にもとづき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。

3 学内の手続き

以上の博士論文は、北海学園大学大学院委員会での報告、承認に先立ち、本研究科では、次の手続きを踏んだ。

令和7年10月27日に、提出予定論文報告が実施された。

令和7年12月10日に、博士学位請求論文が提出された。

令和7年12月11日に、博士学位論文審査委員会が設置された。

令和8年1月28日、文学研究科博士（文学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、最終試験を行い、公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。

令和8年2月3日～令和8年2月12日、本研究科委員会の委員に対し、博士学位請求論文が公表された。

その後、令和8年2月19日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の結果、無記名投票の上、同論文を合格と決定した。令和8年3月4日、北海学園大学大学院委員会において、同論文に関する文学研究科委員会の審査経過ならびに論文要旨が報告、承認され、同年3月20日、博士（文学）の学位が授与された。